巻頭言

『始めるから始まる』

大阪河﨑リハビリテーション大学　カリキュラム委員長
亀井　一郎

「始めるから始まる。」

すべて、初めは危険だ。しかし、とにかく始めなければ始まらない。――ニイチェの言葉である。私は、この言葉に感動し、自らへの戒めとしている。私は、私自身、決して勇気をもって積極的に物事に当たるという性格ではないことを知っている。だからこそ、この言葉に出会ったとき心にズシッと響いたのである。あるいは『そうだ、とにかく始めないと何事も始まらないのだ』と気付いたのかもしれない。

例えが良くないかもしれないが、手術室に入り、これから脳外科手術を始めようとするとき、『もうやるしかない』のである。ただし、なんの準備もしないで手術を始めるのは、これは“ヤブレカブレ”、“イチカバチカ”、“生命に対する冒瀆”であり、絶対にしてはならないことである。医の倫理に最も反することである。

プロ野球の先発投手は、登板の前夜、独り、相手チームの打力と打順を分析し、９回を打者２７人で切ってとる、つまり常に完全試合を頭に描いて勝負に挑む、という話を聞いたことがある。ところが相手チームの打者もプロである。そう簡単に、いや、滅多に完全試合などさせてくれるはずがない。では、塁上にランナーを出してしまった場合（あるいは先取点を取られてしまった場合）、どう対処するか、次善の策を脳に刻み込んでおかなければならない。

手術もこれと全く同じで、術者は、術前には知識を整理し、手術書を読み返し、先達の手術ビデオを何度も見て、完璧な手術計画を立てる。しかし個々の患者さんの脳が、あるいは脳血管が、すべて画一的であるかというと決してそうではなく、微妙に異なるのである。また脳疾患の状況は一様ではなく、予期しない出血に出くわすこともある。そのとき少しも慌てずに、次善の策をとれるように知識と技術と心の準備をしておかなければならない。おじけづいている場合ではない。とにかく完遂しなければならないのである。『始めなければ始まらない』し、いったん始めたら完遂しなければ誰も助けてくれないのである。実際は手術助手や先輩がアドバイスをくれるのであるが、それを待つような気持ちで手術を進めては絶対にいけないのである。

さて、最近の日本人、特に若い人が忘れかけている、実に趣の深い日本語がある。「腰を据える」と「肚（ハラ）をくくる」である。前者は「落ち着いて本気で一つのことを持続する」、後者は「最悪の事態まで覚悟したうえで決意する」という意味である。そもそも腰とは、しなやかで折れにくい心身の粘り強さと持続する集中力を有する部分を表し、その腰を基盤として深い呼吸によって練られたものが肚だそうである。

もう８０年も昔、日本に在住していたある外国人は「日本人は肚の力を信じている。父親は子供がへこたれそうになったとき、『ハラ、ハラ、ハラに力を入れろ』と言い聞かせる。」と言ったそうであ

る。ここでいう「ハラ」は、もちろん胃のあたりを指すのではなく、下腹部を指す。そういえば歌を歌うときも肩の力を抜き、肚に力を入れて歌えば、声量が増し、音程もしっかりする。また、肩に力が入りすぎると、どんなスポーツにおいても上手くいかず「ここぞ」というときに腰と肚の深い力を使えば良い結果が出るものである。

すべて『始めるから始まる』のであるが、『始める』と決めたら、周到な計画、準備と精神力でこれを完遂しなければならない。ただし、一度口にしたことは“断固として行う”のではなく（それはたんなる「頑固」である）、時局や周辺の状況を良く認識し、フレキシブルに、また理性的に決断し、腰と肚の深い力で行為する。そうすることによって、自ら描く理想に限りなく近い結果が得られるのではないだろうか。

これからもロマンを追い続けていきたい。『始めるから始まる』のである。